

診療所実習を体験して

1年 YY

実習前に、自分の意思をまだ言葉で伝えることが難しい子ども達とのコミュニケーションの取り方とたくさんいる患者とその家族とどのように向き合っていき、ニーズに応じているのかを学ぼうと考えていた。そのため、あかりこどもクリニック（院長 北原望先生）で働いている医師や看護師にそれについての話を聞き、医師と患者がどのように関わり合っているのかに注目しようと実習に臨んだ。

実習では最初にクリニック内を案内してもらった。奥様であるあかり先生がこだわった点や、クリニックの理念について説明を受けた。次に、看護師や事務員の方々が事務の仕事や患者へ対応している様子を見学した。そこで気を遣っていることについて仕事を通して伺った。昼食後、あかりこどもクリニックの近所にある「クララクリニック」という産婦人科病院に行った。赤ちゃんの検診の様子を見て、検診時に確認する点などの話を聞いた。また、実際に聴診器を使って心音を聴かせて頂いた。最後に、あかりこどもクリニックに戻り、院長先生が診察している様子を見た。問診の大切さや親と子どもとのコミュニケーションの仕方について話を伺った。

実習を通して多くのことを学んだ。まずは看護師と事務員と医師の間、患者と医師の間でのコミュニケーションの取り方だ。仕事上の医療従事者間の連携は主に電子カルテを通して行われていた。電子カルテは患者の情報や受付で患者に聞いた症状について詳しく事務員が記入していた。そして診察中の人や待機中の人、会計が終わった人など患者の診察状況によって色が分かれているという工夫が見受けられた。それによって、看護師や事務員同士や医師との間で患者の状況を共有していた。その結果、診察がスムーズに行われていた。また、患者と医師の間の意思疎通は医師の知識と洞察力に左右されていることが分かった。診察では9割方が問診によって診断が決まるそうだ。医師は、自身の子どもの一番よく見ている親からの話を聞き、子どもの様子を観察して、症状や治療方法を見つけられていた。次にニーズへの応え方については、患者やその家族の不安を取り除くように尽力されていた。例にあげると、診察の最後には患者に何か心配していることはあるかを聞いて、患者が話しやすい環境をつくられていた。医学に関係のないことでも4児の父である自分の経験をもとに話しておられた。また予防注射をした子どもに対して、頑張ったねと積極的に声かけをしており、可愛い手描きのイラストが描かれた絆創膏を貼ってあげていた。このように、子どもがけがをしたことに責任を感じてしまい、病院に連れて行くために仕事を抜け出さなければならぬ謝りがちな母親や、痛く辛い思いをしている子どもの不安を取り除く努力をされていた。

以上のことより、子どもはもちろん、その家族たちも笑顔で暮らせる町づくりをあかりこどもクリニックは担っていることが実習を体験して学べた。クリニックで働いている方々は患者の立場に立って、何をされたら嬉しいのかを常に考えながら診療にあたっておられた。

最後になりますが、あかりこどもクリニックの皆様には非常にお世話になりました。お忙しい中、貴重な体験をさせて戴きありがとうございました。